

鞠智城と古代西海道の官衙・交通路

堀内 和宏

はじめに

古代における鞠智城の歴史的意義とあり方を新たな視点から明らかにするために、研究が蓄積した大宰府・福岡平野以外の北九州地域の様相に着目して、周辺地域の同時期の遺跡に関する発掘調査成果を見直し、古代官道ルートと地方行政機構という観点から個々の官衙関連遺跡の性格を相互に比較対照していくことが有用である

と考える。その中で、古代律令国家にとっての肥後と鞠智城の意義を明らかにすることが本稿の目的である。

具体的には、既に対外関係史の観点から指摘（石井二〇一三）された観点ではあるが、交通路の問題として論究が十分とは言えない有明海の海上交通を介して肥後と一体の歴史的世界を形成した肥前との歴史的関係を多面的に分析する。「火の国」は肥後と肥前に令

<p>宮都・中央官衙 (平城宮・大宰府クラス)</p>	<p>獸脚硯 蹄脚硯</p> <p>圈足硯</p> <p>転用硯 坏蓋硯</p> <p>墨入れ</p> <p>小刀 墨筆</p>
<p>地方官衙 (国府クラス)</p>	<p>圈足硯</p> <p>転用硯</p> <p>墨入れ</p> <p>小刀 墨筆</p>
<p>地方官衙 (郡衙クラス)</p>	<p>圈足硯</p> <p>転用硯</p> <p>墨入れ</p> <p>小刀 墨筆</p> <p>小刀 筆</p>
<p>地方出先官衙 (郡衙の付属施設・郷庁クラス)</p>	<p>転用硯</p> <p>墨入れ</p> <p>墨汁</p> <p>小刀 筆</p>

第1図 特殊遺物使用状況概念図（佐藤浩司 1993 より）

制国として分割されたものである。七世紀後半の対外的な緊張を背景として、律令制下でのどのような軍事・行政組織が西海道の交通を前提に構築されたかを、法的側面を軸に明らかに

する。同時に古代の官衙・関連遺跡の分布状況を、特殊遺物(定型硯・緑釉陶器・石帯など)を軸に明らかとしつつ、当該期の周辺遺跡の状況を木簡・墨書・刻書土器など、出土文字資料に限らず、遺構・遺物から成る発掘成果を多面的に活用して地域社会の状況を示すことが研究の最終的な目的であり、本「特別研究」の核は基礎段階としての特殊遺物の出土地一覧の作成(表)と遺跡位置の表示(第4図)にある。出土遺跡の類型として(ア)国府・郡家など地方官衙(イ)その周辺遺跡、交通関係官衙、地方寺院(ウ)官道駅路沿い集落(エ)港湾(オ)須恵器窯跡(陶硯のみ)に集約が可能である(川畑・中尾・中川ほか二〇一七)。次いで硯がどう律令支配の中で用いられ、その出土状況が遺跡の官衙としての性格を示す所以を述べる。これを踏まえ、肥前と肥後の関係を軸に官衙と交通路の配置を考える。

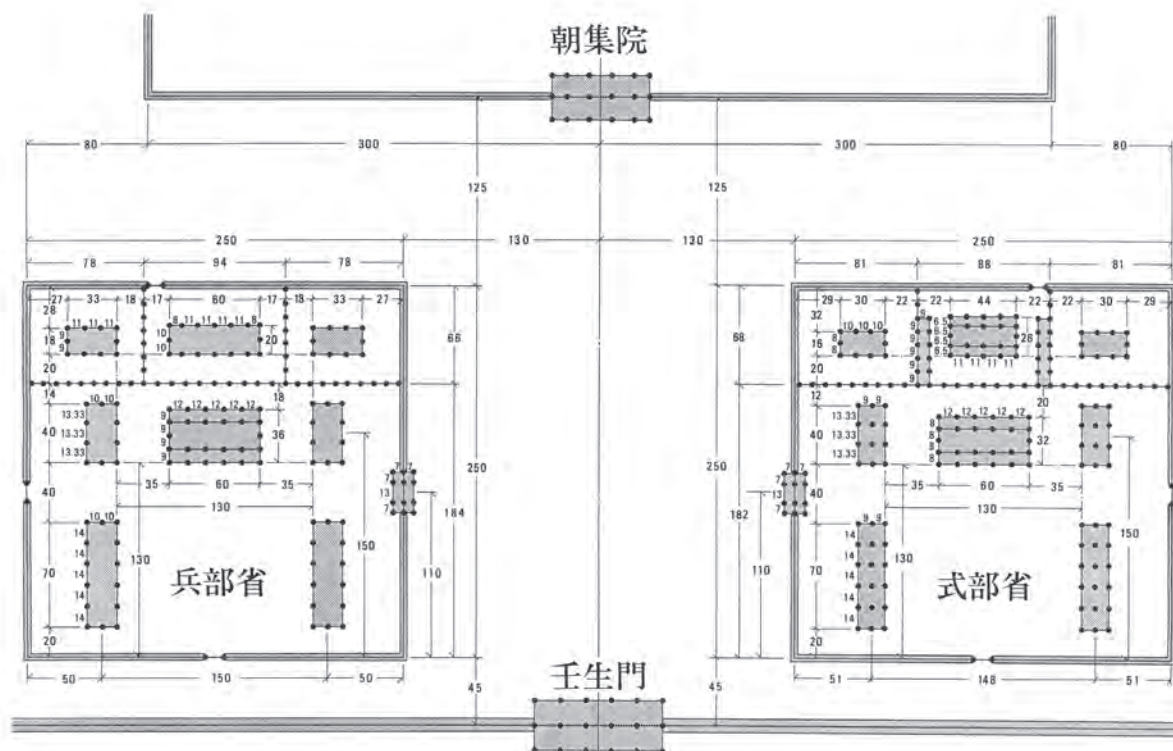
筆者は、肥前国彼杵郡の郡家関連遺跡である竹松遺跡の十万㎡以上の規模の発掘調査と遺物・記録整理、報告書作成に携わる中で、官衙と集落の中で「末端官衙」「交通官衙」などの便宜的な呼称で呼ばれてきた遺跡について、統一的な視点から遺跡の類型を分析することの必要性を痛感した。北部九州から九州地域全般での特殊遺物類例の網羅的収集(緑釉陶器・石帯・硯など)から得た古代律令制下の遺跡の分析成果、古代史の文献史の研究の知見を組み合わせる中で地域史の新しい側面が明らかとなるものと考えている。

官衙に関わる特殊遺物(表参照)

ここでは①円面硯以下の陶製定型硯、②石帯・帯金具(銚帯)③緑釉陶器の出土の有無を基準として挙げる(一)。文字文化の普及と

いう観点も合わせて考えれば、木簡や墨書・刻書土器など出土文字資料が最右翼に挙げられようが、既に西海道官衙研究会や明治大学古代学研究所などの手で集成が行われているため、本研究で参考に留めることとする。九世紀以降の遺跡に関しては越州窯青磁などの初期貿易陶磁の出土状況も基準となりうるが、七世紀後半～八世紀については遺跡の弁別のために有効でないため、参考情報に留める。①③について付表にまとめた。なお、かつて木崎康弘が熊本県球磨郡あさぎり町(旧須恵村)須恵堂園所在の堂園遺跡の古代の木蓋土坑墓の副葬状況を下に、十世紀初めの在地社会では国産緑釉陶器が発色の悪い普及品の大宰府分類Ⅱ類などの越州窯青磁珍重されていた状況を論じている(木崎一九九七)点は留意しておきたい。

緑釉陶器に関しては、個体レベルの情報まで北部九州(福岡・佐賀・長崎・熊本県)の事例の集成は既に行った(堀内二〇一七)。石帯についても既に集成を行った(堀内二〇一七)所である。銅製銚帯についても、遺跡の備考で適宜補完を図った。付表に見るように石帯や緑釉陶器の出土の事実が官衙遺跡たるべき十分条件ではない。伝世によるものか、佐賀県内の104・117・125のように十一・十二世紀を主体とする遺跡から石帯が出土している例もある。しかし定型硯については(オ)は別にして(ア)(イ)が中心であり、(ウ)については発掘調査範囲の制約などにより遺跡の性格が十分に捉えられていないためと考えられる。硯がどう古代の行政の中で用いられ、官僚制支配の中で有した意義が明らかに出来れば、第1図で示されたセット関係により特殊遺物の出土状況と遺跡類型はリンクすることとなる。



第2図 奈良時代後期の平城宮内式部省曹司庁・兵部省遺構配置図（小澤毅 1993 より）

陶硯と律令支配体制

本来は地方官衙が有する支配秩序を明らかにするために、地方官司ごとの具体的な行政マニュアルが現存していれば結構であるが、儀制令十八元日国司条以上の情報については大宰府レベルの官衙でさえ明らかではない。地方官衙における儀礼の構造を明らかにするための構造主義的な方法論の提起はある（井上亘二〇〇三）が、具体的には検討はほとんど進んでおらず、郡符木簡などの出土文字資料の助けを借りる以外は「兵範記」などの記事が国司にまつわる儀礼を知る手段として活用されている研究状況である。そのため、迂遠な方法であるが、中央の官司運営に関する、いわば古代の官人制の根幹的史料の中から硯の持つ意義を窺うしかない。

陶硯が文書行政を通じて地方行政において不可欠な器種であるのみならず、古代国家が郡司を通じて支配するための権力機構を表現するモノであったことについては、以下に示す二史料が存する。いずれも、律令官人制秩序についてその任命システムの説明の中から制度に内在する構造を明らかにするために注目されてきた史料であるが、古代官司が行う政務儀礼の中で硯の有する意義を照射するものとして活用することが出来るものと考ええる。まず郡司の人選に関する郡司試験の史料である。朝堂院南東の式部省曹司（第2・3図参照）がその式場となっている。『延喜式』も『弘仁式』もほぼ同文である。九世紀前半、郡司任用に関する譜第主義が復活した時期の状況が反映されている。

【史料1】延喜式部式下三六試諸国郡司主帳以上条

①「事前準備、名簿作成」諸国銓擬申上大少領并主政帳等、毎

年正月卅日以前集_二於省_一、預_二差丞録史生省掌_一、專_二当其事_一。訖設_二輔以下座於省內便處_一。令_二史生勘造其簿_一、具顯_二功過_一、寫_二其名簿_一、以授_二省掌_一。毎日召計、習_二其申詞_一、案成之後、更寫_二四通_一へ主政帳寫_二一通_一へ以擬丞以上披覽二月廿日以前、勘寫已訖。省掌預命_二諸国朝集使參集_一。

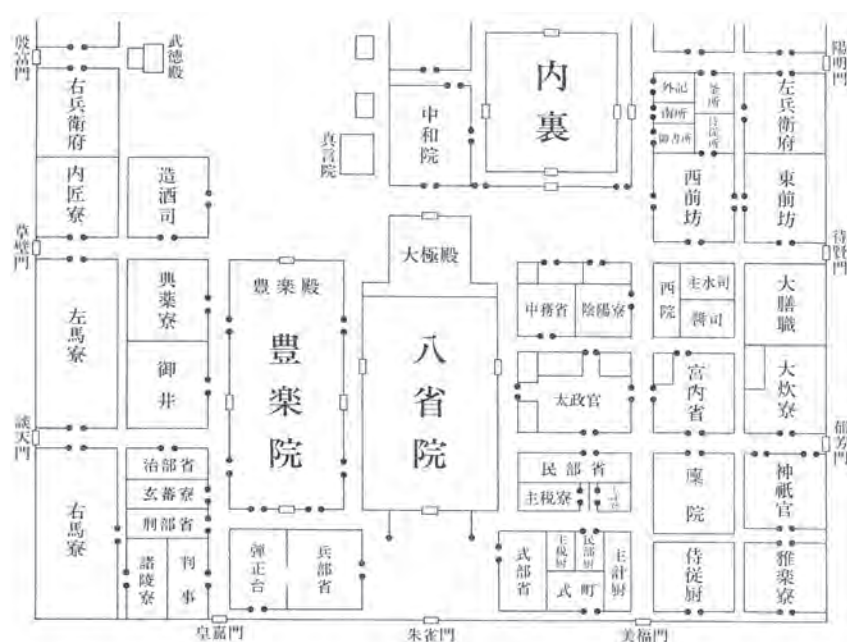
②「一日目 輔による譜第についての口頭試問」其日平旦、輔以下皆就_レ座。省掌置_二版位_一。又預設_二国司座_一。訖輔命_レ丞、丞命_レ録、録命_二史生_一、令_レ召_二省掌_一。省掌称唯、就_二版位_一。丞命曰「率_二候郡司等_一參来」。省掌称唯退出。先引_二東海道一国朝集使及郡司等_一、入屯_二立庭中_一。省掌就_二版傍_一。録披_レ簿先唱_二国司_一、国司称唯就_二版位_一へ五位先入随_レ召就_レ座、録唱起_二座称唯_一。次唱_二郡司_一、依_レ次称唯進_二立使傍_一。唱了丞命侍_レ座。国司称唯就_レ座。輔命_二省掌_一、令_レ申_二譜第_一。省掌称唯伝_レ命。郡司俱称唯依_レ次申訖。丞命候_レ之。国郡司俱称唯。省掌引退出。更引_二次国_一入。唱申如_レ前。六道へ除_二西海道_一勘訖、更定_レ日以申_レ卿、預命_二国郡司_一令_二參集_一。

③「二日目 卿による筆記試験」其日平旦、省掌設_二郡司座并硯_一於版左右庭へ多少随_二人数_一。卿以下就_レ座。史生盛_二簿四宮_一、以_レ次進_二置於輔以上前及丞座傍_一へ親王任_レ卿者、録置_二卿前_一。各有_二常儀_一。卿命_レ丞曰「令_二郡司等參入_一」。(中略)郡司俱称唯就_レ座。省掌退出。訖他省掌執_レ筥、就_二丞後_一受_二問頭_一、降就_二郡司傍_一授_レ之。訖置_二筥於西階上_一復_レ座。郡司執筆各答_二其問_一。随_レ了且進納_レ筥退出。毎_二一道訖_一、他省掌遞引進如_二前儀_一。諸道已訖、省掌進執_二盛試狀筥_一、置_二丞座傍_一退出。聚_二其狀書_一、卿自臨_二判等第_一、随_レ狀黜陟へ陸奥、出羽、西海道等郡司不_レ

在_二集限_一。依_二府国解_一定_二其等第_一。但主政・主帳者、卿以下唱試_二其身_一、不_レ召_二国司_一。

郡司候補者の座と硯がセットで式部省曹司の殿庭に置かれ、筆記試験の最重要のツールになっている。このような儀式の場にふさわしいものは円面硯であろう。本儀式を受けて天皇の前で最終的な任官の決裁を受ける郡司読奏の手続きがあり、天皇が平安後期まで直接そ

の審議に
関わり続
ける儀式
規定と
なってい
たことか
ら、国家
の地方支
配意識が
読み取れ
るとされ
る（磐
下二〇一
七）。そ
の後に太
政官曹司
での郡司



第3図 平安京大内裏官衙配置図（小澤毅 1993 より）

任命の儀式が行われる。

畿内郡司の場合は下級官人層と重なり、官人としての資質を大仰な式部試練の場で問う必要はないが、西海道^(二)の郡司が試練の対象となっていない点については留意が必要である。西海道では大宰府が国の掾以下と郡領を銓衡することについては、大宝二年三月の制によるもので、惣領―国司―評造の三段階の地方支配を国郡二段階に整理した大宝令制でもなお大宰府のみを唐の都督府相当の行政区画として例外的に存置したこととの整合性をとるためである。須原祥二も推測しているように、大宝律令の施行に伴い評司^(三)から模様替えたことを承け、西海道の郡司新任候補者に対しても大宝二年には一度は上京するべく中央から指示が出され、いくらかの混乱があったことを受けての措置であろう。

大宰府には政庁の南側広場の西に不丁地区官衙、東に日吉地区官衙があり、平城宮・東区朝堂院・平安宮朝堂院の南に兵部省・民部省（曹司庁・厨）が設置されていたミニチュア構造を成している。第3図のように、平安宮も平城宮の以上のような構造を持ち越し、広場をより拡大している。式部省曹司は官人制支配の中核の場である。大宰府もそれを模した構造を取る必然性があり、式部試練と同様の方法で郡司候補者を試験し、詳細な結果を式部省に送って、天皇の裁可を仰ぐ郡司読奏にまわしていたものと考えられる。

須原祥二の検討によれば、奈良時代当初には本儀礼は一日目の輔による面接試験と二日目の式部卿による筆記試験は一体のもので、式部卿自身が当年の郡司任命候補者を一人一人連日口頭試問していたとされる（須原一九九八）。が、詮擬作業の厳密化と煩雑化に伴い、一日目と二日目を分離し、卿の前では道ごとに数十人単位でまとめ

て筆記試験を行う方式に移行したとされる。

宮都の中で口頭試問を行うその場がどこかは、式部卿自らが行うという重要性を考えれば、平城宮前期には式部省の北西側の朝堂院（東区）の一角で行われていたものと考えられる。寺崎保広の指摘にあるように、聖武天皇の平城還都後ほどなく、大内裏内の壬生門北へ入って右側に、礎石建築の式部省曹司（Y区）が既存の東方の実務空間の民部省厨（Z区）に続けて造られた（寺崎二〇〇六）ことは官人管理に関わる儀式空間の成立として評価すべきもので、郡領詮擬の場も曹司の成立から程なく移動したものと考えられる。

なお、式部省曹司の正門は朝堂院南門と壬生門の間の広場西門と考えられており（寺崎二〇〇六）、選人は庁舎の野外の広場に道・国ごとに並んで順番を待っていたと考えられる。役所の野外で待たせる点は後掲の【史料2】（ア）の規定と同じである。しかしここで触れる郡司の試練の場合は、官庁の間のたの路上ではなく、格別の支配空間が用意されていた。平安京においては、北側に古代律令制国家の最高の儀礼空間である大極殿朝堂院の殿舎群を望み、南側に朱雀門を控えた広場で待たせることに、郡司を全国支配の下に取り込む律令国家の政治的演出が隠されていたと考えられる。国司（の四等官）の監督下に引率され、国・道ごとの試験の間、時間を定めず郡司候補者を待機させるあり方に、律令国家の地方支配のあり方が表れている。式部省の本庁下僚（省掌）から、本来は位階秩序の上で上位の国司の四等官までもが指図を受ける状況を見て、上京した受験者はいかなる印象を持ったであつたらうか。

儀式での硯の用法を示す次の史料は高名な列見の儀式次第である。式場は『弘仁式』段階では弁官庁、『延喜式』の式部式下二十

列見条太政官曹司である。場所の変化は、古代国家の行政決裁方式が読申公文から文書のやり取りに移行する状況（吉川一九九八）を反映している。なお③④の（ ）は虎尾達哉の分節（虎尾俊哉編二〇〇〇～二〇一七）による。

【史料2】『貞観儀式』巻九 二月十一日列見成選主典已上儀

- ① 「省略」式部・兵部二省による事前の考文作成
- ② 「弁官申政・選人の参入」当日昧旦、掃部寮設二省輔已下座於南門外壇上「式部在二戸内」、兵部在二戸外」。輔已下就座、（ア）二省省掌預於二南門外路」、計二列諸司專当官人・朝集使及選人等「式部在二東、兵部在二西」。大臣就座、弁官申政。訖二省輔已下起座、列二立門外路「式部北面西上、兵部北面東上」。干時時選入以上、以次進而列立。爰大臣喚二召使、二声。召使称唯進就版。大臣宣「喚二式部・兵部」。召使称唯、退出喚之。二省輔共称唯。丞代之参入就版、式部東、兵部西。（イ）大臣宣「成選人等将二参来」。丞共称唯、退出復列。式部輔先参入。次丞・録各一人参入就版。輔就二前版」。丞・録取二諸司申文并別記」、就二後版」。ウ）次省省掌擎版、率二選人等」、且称二容止」、入屯二立屏内」。
- ③ 「係の着座と硯設置」（1）大臣宣「召之」。輔称唯。次丞・録共称唯。輔先登自二西階就二床座」。次丞・録登自二西階就二床子座」へ輔就二東面弁座」、弁座在二南端」。者、丞・録就二北面座」。ウ）（エ）史生等捧二硯并短策筥」、自屏以西参入。登自二西側階」、立二録傍」、転授二録。録受之授丞、丞受之転授（衍力）置二前机」。丞立受二硯筥」置亦同。訖史生退出、候二於屏西南頭」。ウ）爰輔

起座、申云「式部省申久司司乃長上乃某年爾選成留申給」止申。（オ）訖丞一人捧二硯筥」、東進至二東第四間」、北折当二大臣座」、東折進置二机上復座」。ウ）次丞一人捧二短策筥」、同趨至二机前」。跪置二筥於地」、取二短策置二机上」、取二筥復座」。

（5）訖大臣宣「命令喚」。輔起称唯更居、喚二丞名」。丞起称唯即居。輔云「令置版」。丞起称唯居、喚二省掌名」。省掌称唯。丞云「置版」。省掌称唯、趨置版へ自二版位」、南六許尺置」、復列。

④ 「列見の次第」（1）輔云「召之」。録共称唯。録一人取二第一別記読申。（中略）（2）選人共称唯、北面直二立於版東」。ウ）輔命二丞云「退給之」。丞起称唯、唱二省掌名」。省掌称唯。丞命二退出」、省掌称唯転告。選人共称唯退出。省掌一人且称二容止」、随二選人出」、一人留取版退出。（4）丞一人取二筥、進取二短策納二筥復座」。ウ）又丞一人取二硯筥」、史生等趨就二録傍」、受二筥退出等、亦如二初儀」。ウ）訖丞・録自二上退出。訖輔更就版、揖而退出。兵部省亦同。

本儀礼の意義は成選について短冊に上卿の大臣自らが評価を書き入れる所にある。その筆記作業に欠かせない道具が硯であり、儀式の中で重要な舞台装置を演じている。身体性を通じた漢字文化のあり方（新川一九九九）の一つである。しかも大臣が太政官庁舎正殿の席に着く前に、事前に大臣が使用する硯を大臣の机に用意しておくのではない。大臣が席に着き、選人が殿庭に連れて来られた後に（イ）ウ）殊更に式部省の史生に命じて硯筥^四を式場に持参させ（エ）、更に三等官の丞が西階を登って殿上の大臣の席に硯^五を設置させる（オ）という点に、官僚制支配をめぐる視覚的效果まで期

待されていると考えられる。

さて、鞠智城の貯水池の取水口からは円面硯（圈足硯の下端部）が出土している（木村二〇一二）。他の九州の古代山城から定型硯になんぞく円面硯の出土は見られない。遺物の出土量が限定される鞠智城跡の中での特殊遺物の出土の意義は大きい。本節で述べたような政治的意義を有し、国府・郡家クラスの官衙遺跡としての性格を示す特殊遺物としての硯がどうして鞠智城跡でのみ出土しているであろうか。次節で述べることにする。

城と官衙

日本古代において、東北の多賀城や秋田城は台地部に置かれて行政上の機能を兼ね備えていたことが知られる（三上二〇〇五）。古代の国家社会にとって、「城」とは何かを検討する時、二つの面を出発点に考える必要がある。第一には、その概念の起源と漢字表記の訓読の問題であり、第二に官衙としての性格である。

第一の面から言えば、「城」の漢字表記を「キ」と訓読するのは百済の漢字訓読の影響がある。六六三年の白村江の戦いで百済が最終的に滅亡した後、日本列島へ亡命した百済貴族が天智朝において中央官司の枢要な地位に就き、一方で鞠智城などの北部九州の山城の造営に当たったことは知られるが、それ以前の敏達朝の日羅の来日と奏上、殺害事件の記録（六）に「城」の持つ機能について、百済での行政・軍事経験に基づいた政策論の提言が見られる。

父の欽明天皇から任那復興を遺言された敏達天皇は高句麗、新羅、百済の三国の使節往来が交錯した状況の中で、倭系百済官僚で火葦北国造阿利斯登の子で百済第二位の官位を持つ日羅を招聘す

る。百済王の反対にあうも、瀬戸内海水上交通と対外交通に長じた大伴氏―紀氏―吉備海部氏のラインの尽力で招聘に成功する。

まず軍事力の増強よりは民衆の生活の向上、国力の扶養を先にすることを助言する。百済が筑紫に進攻する謀略が存在するため、これに対応するには壹岐対馬に密かに兵力を配置し、先兵の女子子供を殺害する。結論としては要害ごとに堅固な城塞を建設して侵略に対応するとの案である。

対馬の金田城、大宰府を守る大野城、基肄城、吉備の鬼ノ城などの朝鮮式山城の整備が「城」の語義として想定される。しかし福岡市の鴻臚館跡や佐賀県の吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区（佐賀県教育委員会一九九二）から発掘調査により「城」の墨書土器が出土している点も無視できない。

列島の東北部においても、多賀城に端的に見えるように、城はただの防御拠点ではなく、行政拠点であった。八世紀当初に明らかに国府と通用して用いられていた表現が一次史料に見える。

【史料3】威奈大村骨蔵器銘

（前略）（大宝）四年正月、進_二爵從五位上_一。慶雲二年、命兼_二太政官左小弁_一。越後北彊衝_二接蝦虜_一。柔懷鎮撫、允属_二其人_一。同歲十一月十六日、命_レ卿除_二越後城司_一。（後略）

【史料4】『続日本紀』慶雲二年閏正月庚戌条

閏正月庚戌、以_二從五位上猪名真人_一、為_二越後守_一。

二史料の関係や、越後国府の比定・変遷の問題は措き、現在の新

潟市内の淳足柵＝越後城が同時に国司の居所であったと見るのが定説である。和銅元年（七〇八）の出羽郡設置、和銅五年の出羽国分立以前における律令国家の北方への拠点であった。

まとめれば、列島の東西を見渡せば少なくとも八世紀初頭までの時期においては、日本の古代国家にとっての「城」とは防衛と行政機能を兼ね備えたもので、海外からの使節の来朝または軍隊の侵攻に備える目的を含んでいた。決して堅固な高地の山城のみに語義が限られるものでなく、淳足柵や多賀城、鞠智城のような平坦な台地上に展開する意義も大きかったと考えられる。そして圈足硯の出土は鞠智城の官衙の性格を如実に物語っている。

肥前と肥後

古代官道は日本列島における古代律令国家の支配の中で、通常は都と国府の間の速やか且つ確実な陸上交通を担う位置づけであった。古代律令国家は、地域の集落と交通路から隔絶した直線官道を全国に遍く整備することで、万一の対外戦争に備えた全国的な情報ネットワークと象徴的な支配装置を手にした。

その中で西海道肥前路と北陸道能登路は特異な性格を持つ。能登路は能登国府の先も現在の穴水・輪島を経て珠洲の先端部まで至る。佐渡や越中・越後国への海上連絡も想定されていた。日本海を渡る渤海使の到着に備えていたと考えられている。肥前路は肥前国府の先も続いて彼杵郡高来郡に向かい、島原半島の東で終わり、海上駅路を通じて肥後につながる。その経路は海への眺望を重視した尾根上などが優先して選ばれ、大陸からの船や人の到着に備える目的を持っていた（木本二〇〇〇）。島原半島の対岸の三角半島の駅

路の経路についても同様の特徴が指摘できる。

このような円環状の肥前路を見る上で、鞠智城に対応する機能を持つ地を肥前路沿いの古代山城に見つけることは出来ない。しかし八世紀後半からの兵庫としての性格については、肥前にも少なくとも一つの類例が存する。佐賀市（旧大和町）惣座遺跡^①から出土した倉庫群である。

惣座遺跡は嘉瀬川の左岸の微高地上にあって、肥前国庁の政庁の北北西二〇〇mに位置し、長崎自動車道の建設に伴って一九八〇年代前半に発掘調査された。古代のコの字配置の総柱の倉庫群が、弥生中後期の環濠集落の上層に展開する。惣座遺跡の倉庫群は八世紀前半のSB235など七棟の鍵の字配置の建物群に、最も際立った遺構配置を見せつつその機能が始まり、規模を縮小させながら九世紀に続く（田平ほか一九九〇）。国府に付属した倉庫群は全国的にあまり類例がない。建設時期については七三〇年代の官稲混合後に、正倉を管理する財政権限が郡司から国司に移ったが故に、国庁のそばに作られたものではなく、八世紀初頭に遡る。これらの建物群の持つ性格については、鞠智城の総柱倉庫群と同様に、肥前西部の対外防衛に備えた軍事目的の食料備蓄庫としての目的を私案として想定している。律令財政制度的には、『伊豆国正税帳』に見える「兵家稲」に相当するものと考えられる。周知のごとく肥前国を含む西北九州は、対外防衛の拠点として国家的に重視されていた。延暦十一年（七九二）の全国的な軍団兵士制廃止後も、東北と九州の軍団はそのまま置かれ、弘仁四年（八一三）に行われた兵士の定数半減の措置（『類聚三代格』弘仁四年八月九日官符）を経て、肥前国内に三団一五〇〇人の定数は維持される。三つの軍団の内では基肄・

小城団の他、未詳の団を含め拠点は筑後・佐賀平野に分散して置かれ、緩急あれば官道を介して現地に急行する体制であった。長崎半島の先端部に十世紀には肥最^{ひのみさき}警固^{けいこ}所が置かれていたことが『本朝世紀』所引「肥前国高来郡警固所解」の呉越船来航記事に知られているが、これら半島部及び島嶼部の防衛体制は白村江の敗戦後の七世紀後半以来の軍事配置を踏襲していたであろうことが推測されている（竹内ほか一九八〇・堀内二〇一六）。つまり、辺要の地に兵士の警備所を設けて、佐賀・筑後平野の後背地に置かれた軍団から交代の兵士が出され、適宜応援する体制を取っていたと想定される。長崎半島や対馬、五島のような地形が険しい地に最初から千人規模の軍団を常駐させることは実務的に不都合であり、非番の時に農耕させる土地もない（堀内二〇一六）。

食料や武器を辺地に平時から大量に備蓄しておくことも想定されていなかったようである。西海道に賊船が攻めてきた時に備えて藤原宇合が天平四年（七三二）に定めた警固式の概要は『続日本紀』に引かれた宝龜十一年勅によって知られる。そこでは兵士が自宅を出てから五日経てば、公糧を支給できる。相対的に暇な場所の者には生米、要衝に配置された者には糒^{ほい}を支給するとされた（堀内二〇一六）。軍防令6兵士備糒条によれば軍団兵士は糒六斗や塩、装備を自己負担で備え、軍団の所属分隊（十名ごと）に「火」の倉庫（「当色庫」）に合同して保管するものだったが、この場合は五日で公糧を出すことが出来る規定とされていた。農耕に適した土地が少ない辺要では食料の準備が難しく、弓馬に長けた一般農民を臨時徴発する都合を考慮してのことと考えられる。官道などを介して肥前西部全体に有事に往復五日で食料を送り届けるためには、防衛及

び搬出に適切な位置に備蓄が必要であり、肥前国府周辺は最適の地の一つである。西海道肥前路と壱岐連絡路が戦時の食料輸送の大動脈となる。辺地に大量の食料を備蓄しておかなかったのは、海から来た敵にそれを奪われた場合のリスクが高いなどの状況を考慮していることであろう。地理的に見れば、嘉瀬川の東岸にあって、川の防衛ラインの手前に食料を貯蔵しておく戦略的な意義があったものと考えられる。

遺構配置の次の段階で、SB260は近隣では肥前国庁正殿に次ぐ規模の二×六間の大型建築である、報告書では八世紀後半から九世紀初めに存続時期が想定され、南に向けたコの字配置の中庭の管理棟的な施設の所在が推定されている。この変化については、鞠智城と同様に軍事目的で置かれた倉庫が民政目的に転用されたものと想定している。

大村市竹松遺跡の調査で律令地方行政との関わりで最も注目されたものとして「木都」刻書紡錘車の出土がある。九州内出土の類品は佐賀県小城市丁永遺跡（小城町松尾）二区出土の「丁亥年六月十二日 亦□十萬呂」と記銘されたもの（古庄・永田・前田・太田二〇一〇）のみであるが、これら二つの遺物が示す歴史事実は大いである。干支については共伴土器の編年から六八七年の年紀を示すものと報告されている。丁永遺跡も竹松遺跡と同じく、遺跡内ないし側を古代官道の西海道肥前路が通過していたことが想定されている。東国からの防人派遣と西海道肥前路の整備が七世紀終盤の段階に確実に遡ることを示唆する。六六三年の白村江の敗戦後の東アジア地域の政治的緊張を受けて、天武・持統期の軍国体制の下で北九州が緊迫した政治社会情勢にあったことを窺わせる。西海道肥前路の建

設と鞠智城ら古代山城の建設は期を一にして行われたものであった。

なお潮の満引きが大きく遠浅の有明海に唐の大型の軍船が入ってくるとは考えがたく、鞠智城の建設目的として有明海への侵攻への備えを考えるべきでないとの指摘（井上和人二〇一七）も、対唐戦争を想定した戦略を論じる中で言及されたことはある。しかし島原半島と天草に挟まれた口之津瀬戸を通過するには現地の海流と地形に通じた水先案内人が必要であることは、有明海地域の弥生後期歴史的世界を論じる中で宮崎貴夫が指摘しており（宮崎二〇一二）、長島海峡も同様である。葦北国造と百済との交流も、九世紀の飽田郡への新羅海賊の来寇も在地勢力とは無縁のものではありえない。

国家が北部九州の防衛のために有明海地域を押さえるのに必要なものは、肥後地域の豪族への監視の体制を整備すること、口之津瀬戸に近づく外国船の来航を即座に知るシステムを整備することである。これが長崎半島の先端部の脇岬への警固所（の前身施設）の設置であった（堀内二〇一六）。最初の外国軍船の到着情報を察知し、肥後の在地勢力との提携を国家が掣肘できれば、有明海岸の防衛は易い。鞠智城を行政・軍事の拠点として食糧や武器を保管しておけば、熊本平野へのわずかな外敵の侵入のみならず筑後平野での決戦（井上二〇一七）に備えた後背基地としての機能を発揮する。

また、別稿（堀内二〇一六）で触れたように、百済船の肥後葦北津への推古朝の来航をヤマトへ報せたことが筑紫大宰の初見記事であることは、七世紀初頭のヤマト王権がどう北部九州への支配を展開しようと綿密に構想したかを示している。

おわりにかえて

肥後の古代史を考える際、肥前との地理的關係は見過ごせない観点である。鞠智城と肥後地域の古代史に関しては広く律令国家の形成史、東アジア世界史の観点から多くの研究が積み重ねられてきた。しかし従来の研究は多く、福岡平野や大宰府を中心とした古代の西海道の社会像を構築してきた。近年の研究で指摘されるように、那津屯倉Ⅱ鴻廬館Ⅱ博多を対外交通の窓口に限定する関市令以来の古代国家の入国・貿易管理システムは十二世紀まで有効性を持った（渡邊二〇一二）ことは否めないが、古代の外国船の来着地、遣唐使船の帰着地は風向きと海流により多様であり、西九州地域がその寄港地たる事実揺るがない。肥前・肥後の結びつきは、肥前型器台・台付甕等に見える弥生時代以来の有明海の交通路（宮崎二〇一二）を前提としている。肥前・肥後の地域間関係は『日本書紀』や『肥前国風土記』での景行天皇の巡行伝承にも象徴されている。

古代中世における九州と半島の間の交通路は、福岡平野から沖ノ島を介するルートに加えて、百済からの日羅の来航ルートや藤原純友の逃走ルートなどに見えるように対馬、松浦半島と五島列島を経て有明海や南九州に入るルートがあった（新川一九九八）。『日本書紀』における城の起源は肥後経由での百済からの日羅の来訪説話であり、大宰府の起源の筑紫大宰の初出記事は肥後葦北津への百済船漂着の報告であった。鞠智城の位置はこれまで論じられてきたように筑前・肥前・筑後の防衛ラインのバックアップと共に、有明海に在地豪族の導きで外国軍が侵入することを防ぐ意味を兼ね備えていたものと考えられる。

『本朝世紀』に見える天慶八年の貿易船来航事件からは、長崎半

島先端の脇岬に置かれた警固所と周辺住民と外国貿易船の間で、建前は警固式による海上警備行動と博多湾での貿易一括管理の原則を保った対応を取りながら、実際には現地での交易が行われた事実を示す。十二世紀前半（大宰府陶磁器編年C期）において朝鮮半島から肥前西部、南九州、南島世界につながる南北交易ルート（堀内二〇一六）が存在したことは、高麗産無釉陶器、滑石産石鍋、徳之島産カムイヤキの分布に示される。九世紀の新羅海賊の肥後への侵入を含め、在地勢力がトランスナショナルに東アジア諸地域の人々と交易を行っていたとの認識は、九州の中世への移行期に関わる研究の道しるべとなるものである。

注

(一) 佐藤浩司一九九三の概念図(第1図)・中島二〇一五参照。実際の発掘調査による遺物の出土状況が概念図と一致するわけではないが、それは発掘調査範囲や遺物整理などの制約に由来するものと考えられる。

(二) 西海道と並んで、末尾では陸奥、出羽の郡司も二日目の筆記試験が免除される。ことが記されるが、ただ国解を以て都での試験に換えるのか、二国の国府で同等の試験を行ったかは定かでない。須原祥二は式部省での実質的な書類審査として儀式書に書かれる「断入」の意義を認め、少なくとも弘仁式段階では式部省が国擬を受けて厳しい審査を行っていたことを指摘する(須原一九九八)が、その判断の材料となる国擬、西海道と東北の違いについては今なお研究課題に止まる。

(三) 早川庄八によれば、郡領試験は浄御原令の「法官」による官人管理の段階に遡る(早川庄八一九八六)。

(四) 本儀式では硯でなく硯宮を用いている点に、平面的な方硯・円形硯などの

使用が一般化した九世紀半ば以降の様相が示されている。硯の形態変化と儀式のあり方との関係については他の儀式の円面硯が用いられたかどうかについては他の儀式の変遷過程の検討を含め、今後の検討課題としたい。

(五) 日本古代において多様な型式の陶硯が文字文化と共に中国から(百済を経て)持ち込まれ(吉田一九八五)、官司・官人制の秩序に応じた使い分けがなされた。むろん壮麗な大型の蹄脚硯や円面硯の使用の盛期は八世紀前半までであり、九世紀半ば以降は実務的な方硯や円形硯の使用が上級官司でも一般化する点が指摘されている(巽二〇〇四・横田一九八三)。弘仁式段階、さらには奈良時代の儀式規定は定かでないが、八世紀後半の儀式構造は貞観段階にも維持されているものと考えられる。口頭決裁ではなく上級決裁者が筆をとって公開の場で文書決裁を行う儀礼のために、大時代的な蹄脚硯に対して八世紀半ばに硯面一体成形技法のB型式(青木敬二二〇一四)が付加された可能性を予察している。

(六) 本記事は実録性が高く、外交関係記事や大伴氏の葦北国造氏の家記に基づくものと考えられる。

(七) 【史料5】慶雲二年(七〇五)十一月の「越後城司」は越後守とほぼ同一と見られるが、【史料6】と任命日に差異がある。先に城柵の管理者となり、追って越後全体の行政に当たる越後守の職務を帯びることとなったと見られる。越後国は大宝二年(七〇二)三月に頸城以下四郡を越中国から移管して間もなく、頸城郡内の国府は未整備であったと推定される。

(八) 惣座遺跡の調査については、当時調査を担当した本田秀樹氏(長崎明誠高校教諭・前新幹線文化財調査事務所文化財保護主事)から教示を得た。

引用文献

青木 敬 二〇一四 「蹄脚円面硯Bの出現とその特質」『奈良文化財研究所紀

要二〇一四』

石井正敏 二〇一三 「東アジア史からみた鞠智城」『ここまでわかった鞠智城』

〔鞠智城シンポジウム2012 成果報告書〕

井上和人 二〇一七 「古代山城の真実——鞠智城はなんのためにつくられたのか——」『鞠智城の終焉と平安社会』〔鞠智城東京シンポジウム2016 成果報告書〕 熊本県教育委員会

井上 亘 二〇一六 「国府と郡家——地方官衙の形成」『古代官僚制と遣唐使の時代』同成社（初出二〇〇三）

磐下 徹 二〇一七 「郡司読奏考——郡司と天皇制」『日本古代の郡司と天皇』

吉川弘文館（初出二〇〇七）

川口洋平 一九九九 「長崎県における古代遺跡の調査」〔『古代交通研究』第九号）

本木雅康 二〇一一 「肥前国彼杵・高来郡内における古代官道」『古代官道の歴史地理』同成社（初出二〇〇〇）

佐藤浩司 一九九三 「墨書土器・ヘラ書き土器と硯に関する一考察——律令時代の豊前と大宰府を中心に——」『古文化談叢』第30集（下）九州古文化研究会

佐藤全敏 二〇〇八 「日本古代の四等官制」『平安時代の天皇と官僚制』東京

大学出版会（初出二〇〇七）

新川登亀男 一九九八 「東アジアのなかの古代統一国家」『長崎県の歴史』山川出版

新川登亀男 一九九九 「日本古代の儀礼と表現」吉川弘文館

須原祥二 二〇一一 「式部試練と郡司読奏」『古代地方制度形成過程の研究』

吉川弘文館（初出一九九八）

竹内理三・瀬野精一郎・田中健夫 一九八〇 『長崎県史 古代中世編』長崎県

巽淳一郎 二〇〇四 「紙・筆・墨・硯」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』

奈良文化財研究所

寺崎保広 二〇〇六 「式部曹司庁の成立」『古代日本の都城と木簡』吉川弘文館（初出二〇〇〇）

中島恒次郎 二〇一五 「土器から考える遺跡の性格——大宰府・国府・郡家・集落——」『官衙・集落と土器Ⅰ』〔第18回古代官衙・集落研究会報告書〕

早川庄八 一九八六 「選任令・選敘令と郡領の「試練」」『日本古代官僚制の研究』岩波書店（初出一九八四）

堀内和宏 二〇一六 a 「肥前国彼杵郡・高来郡の歴史地理的特質と古代地方社会の労働力動員について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号

堀内和宏 二〇一六 b 「肥後葦北津に漂着した百済使節について」『東北亜細亜文化研究』48（韓国釜山）

堀内和宏 二〇一六 c 「中世肥前と南九州及び南島との関係について」『東アジア世界の竹松遺跡』長崎県考古学会秋期大会資料集（紙上報告）

堀内和宏 二〇一七 「竹松遺跡と西日本の村落寺院」『民衆史研究』九一号

三上喜孝 二〇一三 「城柵と文書行政」『日本古代の文字と地方社会』吉川弘文館（初出二〇〇五）

宮崎貴夫 二〇一二 「有明海をめぐる弥生文化研究の現状と課題——西北九州地域からの視点——」〔『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』平成二四年度長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会資料集〕

森 公章 二〇〇〇 『古代郡司制度の研究』吉川弘文館

山口英男 一九九三 「郡領の詮擬とその変遷」（笹山晴生先生還暦記念会編）一九九三『日本律令制論集』下巻・吉川弘文館

横田賢次郎 一九八三 「福岡県内出土の硯について——分類と編年に関する一試案」『九州歴史資料館研究論集』9

吉川真司 一九九八 『律令官僚制の研究』 塙書房

吉田恵二 一九八五 「日本古代の陶硯の特質と系譜」 『國學院大學考古資料館

紀要』第1輯

渡邊 誠 二〇一二 『平安時代貿易管理制度史の研究』

虎尾俊哉編 二〇〇〇～二〇一七 『訳註日本史料 延喜式』〔全三卷〕 集英社

〔発掘調査報告書〕

浦田和彦・堀内和宏・東郷一子 二〇一七 『平野遺跡』 新幹線文化財調査事務

所調査報告書第2集・長崎県教委

浦田・堀内・東郷ほか 二〇一七 『竹松遺跡Ⅰ』 新幹線文化財調査事務所調査

報告書第3集・長崎県教委

小澤毅 一九九三 「1 式部省の調査 第229・235次」 『1992年度平

城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 奈良国立文化財研究所

川畑敏則・中尾篤志・中川潤次ほか 二〇一七 『竹松遺跡Ⅱ』 新幹線文化財調

査事務所調査報告書第4集・長崎県教委

川畑・中尾・中川・堀内 二〇一八 『竹松遺跡Ⅲ』 新幹線文化財調査事務所調

査報告書第5集・長崎県教委（近刊）

木崎康弘 一九九七 「堂園遺跡の調査とその成果」 『堂園遺跡・中尾遺跡・別

府遺跡』 熊本県文化財調査報告第一五九集

木村龍生 二〇一二 「貯水池の調査」 『鞠智城跡Ⅱ』 熊本県文化財調査報告第

二七六集

小池伸彦 一九九二 「2 式部省・式部省東役所の調査 第222次」

『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 奈良国立文化財研究所

佐賀県教育委員会 一九九二 『吉野ヶ里』 佐賀県文化財調査報告書第一一三集

田平徳栄ほか 一九九〇 『惣座遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第98集（九州横

断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書11〕

寺崎保広 一九九一 「4 式部省の調査 第220次」 『1990年度平城宮

跡発掘調査部発掘調査概報』 奈良国立文化財研究所

古庄・永田・前田・太田正和 二〇一〇 『北小路遺跡1・2区丁永遺跡1・2・4・

5区』 小城市文化財調査報告書第9集

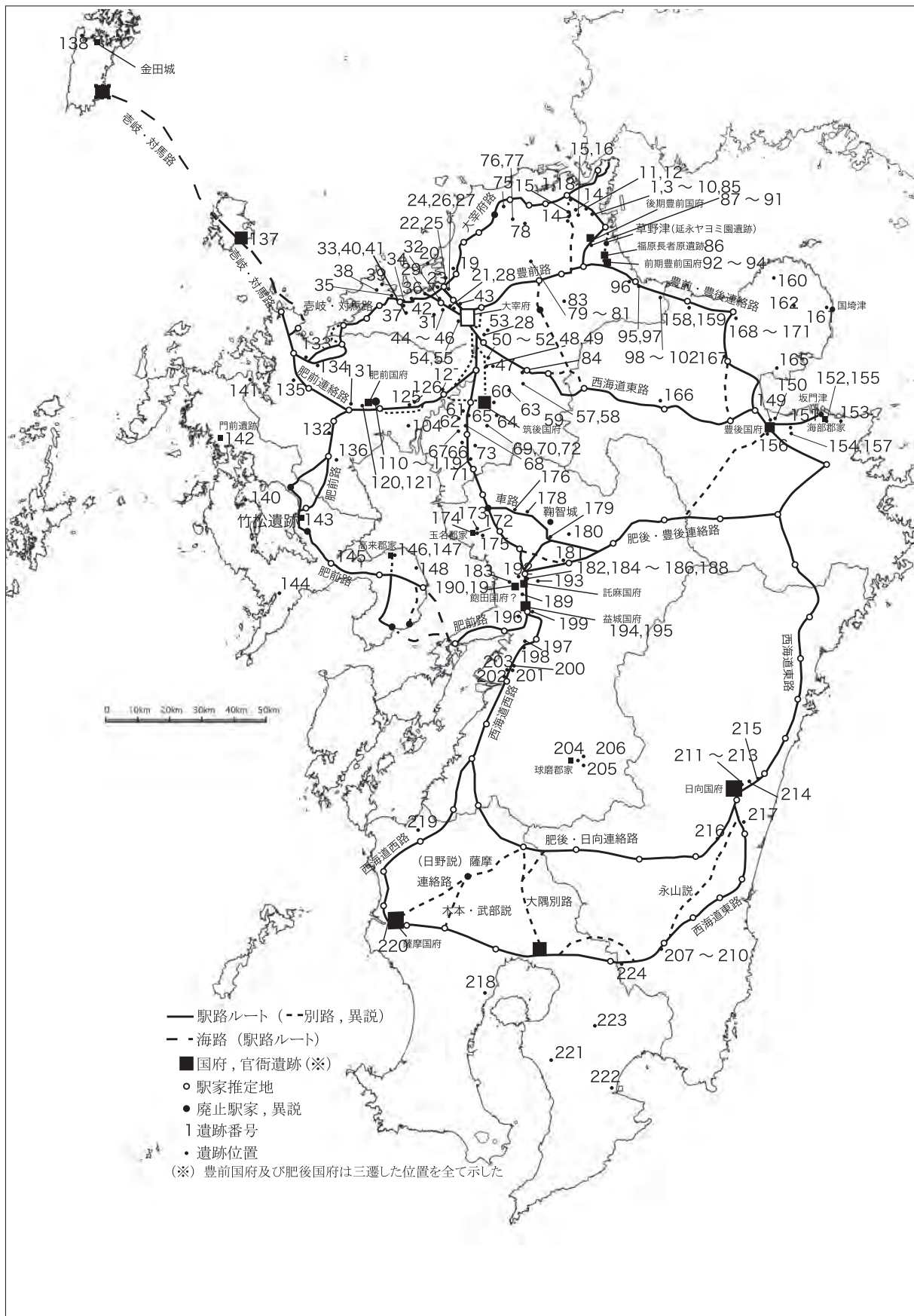
九州内特殊遺物出土遺跡一覽表

- ・大宰府条坊と周辺は事例修正の範囲から除いた。
- ・文献、事例収集には山梨千晶主任文化財保護主事（長崎県埋蔵文化財センター）の協力を得た。

道路名	所在地	調査原因	類型	陶硯	石帯	緑相関 器	出典	シリーズ名	号数	報告者	発行年	調査年	備考
御神社社路跡	福岡県北九州市小倉南区杉樹	不明	才	圓足硯	なし		天覧寺山階路群	北九州埋蔵文化財調査会	—	小田富士雄	1977	—	小田藩年譜明治初めから昭和戦後、小田藩士館1962「福岡藩年譜」古岡出土の土庫遺物(川崎吉彦著)148-1
1 杉樹神社跡	福岡県北九州市小倉南区杉樹	重丸自動車工場建設	ウ	圓足硯	なし	○	杉樹遺跡第1地点	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第27集	木下文平	1966	2000	銅鑄造りも出土
2 聖堂遺跡	小倉北区東區通	北九州都市高速建設	イ	瓦葺	なし	○	聖堂遺跡Ⅱ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第42集	上村昌隆・京口修治	1986	2000	西王部の瓦葺遺構
3 福岡南条道跡	北九州市小倉南区南条Ⅲ丁目	東九州自動車道建設	ウ	瓦葺硯	なし	○	杉樹遺跡第3地点	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第17集	谷口俊浩	2004	2001	西王部の瓦葺遺構
4 加治屋敷遺跡	北九州市小倉南区杉樹Ⅱ区	市道改築	ウ	瓦葺硯	なし	○	加治屋敷遺跡Ⅰ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第50集	木下文平	2005	2001	銅鑄造りも出土
5 洞門遺跡	北九州市小倉南区東郷Ⅳ丁目	公園整備用地造成	イ?	圓足硯	丸柄1・逆方	○	洞門遺跡Ⅵ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第74集	木下文平	1988	1984~95	銅鑄造りも出土
6 高野道跡	北九州市小倉南区高野町Ⅱ丁目0	長公園建設	ウ	圓足硯	逆方	○	高野道跡Ⅲ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第18集	梅崎寛司	1997	1991~92	銅鑄造りも出土
7 下山道跡	北九州市小倉南区大字宮下坂	河川改修・堤道建設	ウ	—	逆方	○	下山道跡Ⅲ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第3集	前田義久	1980	1989~90	銅鑄造りも出土
8 下山道跡	福岡県北九州市小倉南区筑	土工工事	ウ	—	逆方	○	下山道跡Ⅳ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第63集	栗山伸司	1985	1983	銅鑄造りも出土
9 山下道跡	福岡県北九州市小倉南区筑	市道改築	ウ	—	逆方	○	山下道跡Ⅴ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第45集	中村利彦人	2011	2000	銅鑄造りも出土
10 洞門道跡	福岡県北九州市小倉南区筑	市道改築	ウ	—	逆方	○	洞門道跡Ⅶ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第56集	宇野清敏	2000	2000	銅鑄造りも出土
11 長野・早田道跡	北九州市小倉南区長野本町Ⅰ丁目	市道改築	ウ	瓦葺硯	○	○	長野・早田道跡Ⅷ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第54集	山口徹夫・佐藤浩司	1987	1987	銅鑄造りも出土
12 石田・洞門道跡	北九州市小倉南区上石田Ⅱ丁目5・6	市道改築	ウ	—	逆方	○	石田・洞門道跡Ⅸ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第18集	佐藤浩司	1996	1990	銅鑄造りも出土
13 洞門道跡	小倉南区長行・尾尾Ⅰ・Ⅱ丁目	市道改築	ウ	—	逆方	○	洞門道跡Ⅹ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第68集	宇野清敏	2007	2004	銅鑄造りも出土
14 洞門道跡	北九州市小倉南区洞門Ⅱ丁目	市道改築	ウ	—	逆方	○	洞門道跡Ⅺ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第16集	栗山伸司	1996	1992	銅鑄造りも出土
15 金山道跡	北九州市小倉南区横代東町Ⅳ丁目	都市計画道路建設	ウ	—	逆方	○	金山道跡Ⅻ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第207集	川上秀秋	2004	1998~99	銅鑄造りも出土
16 長公道跡	北九州市小倉南区横代東町Ⅲ丁目	民宅地造成	ウ	—	逆方	○	長公道跡Ⅼ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第191集	木下文平	1986	1988	銅鑄造りも出土
17 高山道跡	北九州市小倉南区長公町Ⅲ丁目	市道改築	ウ	—	逆方	○	高山道跡Ⅽ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第22集	栗山伸司	2002	1993	銅鑄造りも出土
18 牛久保道跡	北九州市小倉北区明和Ⅰ・Ⅱ丁目	市民生活センター建設	エ	瓦葺硯	丸柄2・逆方	○	牛久保道跡Ⅾ	北九州市埋蔵文化財調査報告書	第53集	宇野清敏	1980	1979	銅鑄造りも出土
19 多々良久田道跡	福岡県福岡市東区	流通施設拡充	エ	瓦葺硯	丸柄4・逆方	○	多々良久田道跡ⅰ	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第121集	村上祐男	1986	1985~84	SDFは第9次調査から連続。那津の湧りと松浦崎か
20 海の中道道跡	福岡県福岡市東区	学術調査	エ	—	丸柄	○	海の中道道跡ⅱ	朝日新聞・海の生道跡奉還調査実行委員会	第202集	村上祐通	1993		
21 唐人橋道跡第8次	福岡県福岡市博多区大目Ⅰ丁目3・14	自宅兼共同住宅建設	ウ	圓足硯	なし	○	唐人橋道跡ⅲ	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第52集	力能卓治	1999	1997	経路する福岡道跡に直結的遺構あり
22 箱崎道跡第28次	福岡市東区馬出5丁目22番・箱崎Ⅰ丁目1番	土地整理事業	イ	—	逆方	○	箱崎道跡ⅳ	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第53集	佐藤一朗	2005	2001~03	7区に11世紀前半から中身の戸や土手など、北宋期の越州窯青磁鉢が多数出土
23 箱崎道跡第64次	福岡市東区箱崎Ⅰ丁目2804番地	共同住宅建設	イ	—	逆方	○	箱崎道跡ⅴ	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第14集	力能卓治・大庭康時	1988	1984	一部のみ瓦片・瓦片あり
24 博多道跡第港4次	福岡県福岡市博多区洲崎所町	同上	エ	—	逆方	○	博多(博多駅跡線ⅵ)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第56集	池崎龍二	1989	1984~86	12世紀前半より成立の市街地区間溝。大量の土師皿、奈良時代の瓦片を12世紀の土灰が取り込む。14世紀前半以降の8号溝に切れる。直上に火薬類骨集石遺構
25 博多道跡第115次	福岡市博多区店前町	地下鉄建設	エ	—	逆方	○	博多(博多駅跡線ⅶ)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第105集	折原淳一・柳・本郷三子・林田薫三	1986		
26 博多道跡第116次	福岡市博多区店前町37	建物跡跡地道路施設	エ	—	逆方	○	博多(博多駅跡線ⅶ)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第106集	折原淳一・柳・本郷三子・林田薫三	1986		
27 博多道跡第117次	福岡市博多区店前町37	建物跡跡地道路施設	エ	—	逆方	○	博多(博多駅跡線ⅶ)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第107集	折原淳一・柳・本郷三子・林田薫三	1986		
28 博多道跡第118次	福岡市博多区店前町37	建物跡跡地道路施設	エ	—	逆方	○	博多(博多駅跡線ⅶ)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第108集	折原淳一・柳・本郷三子・林田薫三	1986		
29 博多道跡第119次	福岡市博多区店前町37	建物跡跡地道路施設	エ	—	逆方	○	博多(博多駅跡線ⅶ)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第109集	折原淳一・柳・本郷三子・林田薫三	1986		
30 博多道跡第120次	福岡市博多区店前町37	建物跡跡地道路施設	エ	—	逆方	○	博多(博多駅跡線ⅶ)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第110集	折原淳一・柳・本郷三子・林田薫三	1986		
31 柏原道跡M地点	福岡県福岡市南区柏原	住部公園団地建設	イ	圓足硯	丸柄3・瓦葺硯	○	柏原道跡ⅴⅴ	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第191集	山崎純男	1988	1983	6世紀後半から10世紀に存続。周囲にSBO(他の郡立柱三、初期唐系青磁など出土
32 井原B道跡・第17次	福岡県福岡市南区井原Ⅰ丁目地内	市道建設	ウ	圓足硯	なし		井原B道跡ⅲ	福岡市埋蔵文化財調査報告書	第187集	屋山洋	2004	2000~01	屋山洋門前川に近接

72	郡二田遺跡	福岡県みやま市道高野山町二田		遺跡	御二田遺跡Ⅰ	みやま市文化財調査報告書	第12集	田中康隆	2016	未刊	西海道遺跡図
73	山の遺跡	福岡県みやま市山田町西原内	県道飯江長田線建設	の	〇	山の遺跡・斎宮古墳群	第16集	小田和利	2001	2000	第6次調査 西海道遺跡図
75	山下遺跡	福岡県遠賀郡岡垣町大字山田	宅地造成	の	〇	岡垣町文化財調査報告書	第19集	下山純也(調査担当・中川清)	2000	1996	町内の片山118号を宮崎縣から御杖具、中央部から御杖具(出土・岡垣町3集、1978)
76	竜徳遺跡?	福岡県宮崎市(旧幹手郡宮田町)龍徳	墓探	?	丸瀬	宮田町誌	上巻	大曲芳吉	1978	—	『全圖上巻附集成より』
77	西原敷遺跡・古墳群	福岡県宮崎市(旧幹手郡宮田町)原田 1443ほか	農業基盤整備		〇	原田遺跡群	第14集	吉岡清	1998	1995	
78	中岡中学校敷六義群	福岡県中間市蓮生町高井400	—	の	三箇円形 規	小田富士雄「福岡県瀬戸横六古墳出土土の片面硯」	48-1	小田富士雄	1962	—	別添瀬戸横六古墳
79	黒屋遺跡	福岡県遠賀市鹿毛黒屋	農業基盤整備	の	〇	福岡県文化財調査報告書	第32集	須原健二・小井上裕弘	2007	1996	
80	井尻遺跡	飯塚市(旧嘉穂郡飯田町)佐与字井尻	農業基盤整備	の	〇	飯塚市文化財調査報告書	第9集	柳山龍一・八木健一郎	2004	2002	
81	土取遺跡	飯塚市(旧嘉穂郡特別町)内野字土取/石原	農業基盤整備	の	〇	筑穂町文化財調査報告書	第8集	柳山龍一・杉内郷	2004	2001～02	
82	観音寺	福岡県田川郡添田町中元寺字観音寺	農業基盤整備	の	丸瀬	添田町埋蔵文化財報告書	第7集	岩本孝之	2009	2004～05	
83	才田遺跡	福岡県朝倉郡朝倉町大字才田	九州横断自動車道建設	イ	巡行	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書	第48集	宮田裕之	1998	1985	西海道豊後路、広瀬郡佐賀郡に近接、横断道開通で、朝倉市岡原遺跡から御杖具・巡行、福岡古墳地区7号墳本署から御杖具の御杖具、長島遺跡から御杖具出土
84	雨蓮遺跡群	福岡県京都郡刈田町大字刈田/雨蓮	東九州自動車道建設	イ	〇	福岡県京都郡刈田町雨蓮遺跡群の調査	第1集	飛野・坂元・杉原・酒井・坂本	2004	2000～01	
85	福岡長者原遺跡	福岡県行橋市南泉之丁目	東九州自動車道建設	フ	圓足規	福岡県長者原遺跡第3次調査・福岡県遺跡第2・3次調査・福岡県遺跡第2・3次調査報告書(九州歴史資料館刊)	第13集	岡田倫	2014	2010～03	
86	高来井止水遺跡	福岡県行橋市大字高来井止水45	農業圃場整備	イ	丸瀬	行橋市文化財調査報告書	第38集	中原博	2011	1997～98	最低限の遺構・遺物実測図を提示し、本文は概要報告のみ
87	崎野遺跡	行橋市奥中央1丁目11番	宅地開発	の	〇	崎野遺跡	第28集	小川孝純	2001	1980	
88	徳永法師の埴田遺跡	行橋市大字徳永法師町5543地	農業圃場整備	の	〇	徳永法師の埴田遺跡の調査	第20集	中原博	2002	2001～02	
89	徳永法師の埴田遺跡	福岡県行橋市大字徳永法師小畑	農業圃場整備	の	〇	福岡県文化財調査報告書	第194集	秦澤二・藤井啓文	2004	2001～02	
90	辻壇下出口遺跡	福岡県行橋市大字辻壇下5925ほか	農業圃場整備	の	〇	福岡県埋蔵文化財調査報告書	第1集	伊藤嘉弘	2003	1999	報告書未刊
91	豊前前所跡	福岡県京都郡みやま町(旧嘉津町)園作/河村	史跡整備?	フ	風字規	豊前前所 平成6年度発掘調査概要	第15集	末永敦廣	1995	1994	第3・9巻で埴田開闢報告
92	幸木遺跡	福岡県京都郡みやま町(旧嘉津町)園作/幸木	幸木遺跡	フ	圓足規	幸木遺跡 考古学調査報告書(豊前文化財調査報告書)	第2集		1976		
93	木山藤寺	京都郡みやま町(旧藤川町)藤川木山	幸木遺跡	イ	圓足規	木山藤寺跡	—		1975		
94	越路黄松遺跡	福岡県上郡椎田町(現梁上町)大字越路字黄松	興達建設	イ	丸瀬	越路黄松遺跡	第61集	小池史郎・飛野博文	2001	1998	石原未掲載。越路6部遺跡、越路長持遺跡からも埴田開闢出土
95	赤穂森ノ坪遺跡	福岡県梁上郡築城町(現梁上町)	国道164号建設	イ	丸瀬	福岡県梁上郡築城町所在赤穂森ノ坪遺跡の調査	第61集	小池史郎	1992	1989	福岡県教育委員会調査、10種の建物跡あり。遺跡の北方に500mに亘る築城跡の所在を比定
96	ツツケ畑遺跡	福岡県梁上郡上毛町(旧新吉富村)大字里水字ツツケ畑	国道164号建設	の	〇	ツツケ畑遺跡第3次調査・福岡県遺跡第3次調査報告書(福岡県教育委員会)	第38集	秦澤二	1997	1994	
	道ノ本遺跡	福岡県梁上郡上毛町(旧新吉富村)椿ノ木48ほか	農業圃場整備	の	〇	福岡県埋蔵文化財調査報告書	—	矢野和昭	2003	2002	未報告?
97	大瀬下大坪遺跡	福岡県梁上郡上毛町大字(旧星200-1A・307-A)	興達建設	イ	圓足規	大瀬下大坪遺跡	第11集	矢野和昭	1998	1996～97	国指定史跡大瀬下大坪遺跡。概要報告書であり、未報告の埴田の埴田の埴田
	ハノ下ノ原遺跡	福岡県梁上郡上毛町(旧新吉富村)大字ハノ下ノ原301・302ほか	道の駅建設	イ	?	和井田遺跡・成徳山之内遺跡・ハノ下ノ原の遺跡	第51集	矢野和昭	2016	1999～2000	旧河川をばらんだ西側に大ノ瀬川遺跡跡が立地、ハノ下は遺跡に開ける古代地帯、溝に龍が通行し、1号大瀬下遺跡、20集から遺跡の埴田を調査
	豊ノ原遺跡	福岡県豊前市永久163-1/69-1/豊田	農業圃場整備	の	〇	青相向原遺跡・永久遺跡	第12集	秦澤二・小池史郎	2001	1999	
98	永久遺跡	福岡県豊前市久路土	農業圃場整備	の	〇	久路土鐘田遺跡・久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡	第27集	米田隆也	2010	1998	市内大石石畑遺跡から銅鏡出土
99	久路土鐘田遺跡	福岡県豊前市久路土	農業圃場整備	イ	〇	久路土鐘田遺跡・久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡	—		1977	1966	詳細不明 奈良文化財研究所遺跡図より
100	四郎丸山遺跡	福岡県豊前市荒堀	表面採取(米田隆也氏)	イ	〇	天鏡寺山原跡	—		2000		
101	荒堀大塚山遺跡	福岡県豊前市荒堀	農業圃場整備	の	〇	豊前市文化財調査報告書	第24集	棚田昭仁(編集)・坂梨祐子	2008	1998	
102	薬師寺塚原遺跡	福岡県豊前市薬師寺	農業圃場整備	の	〇	久路土六田遺跡・薬師寺塚原遺跡	第12集	村上敦	1999	1996～98	旧二田町、梁上郡家か?未報告?
103	塚田南遺跡	福岡県糸島市二丈梁江2055-1ほか	集合住宅地	イ	円面規	—	—		2006		
104	蓮池上天神遺跡	佐賀県佐賀市蓮池町大字小松	河川整備	の	巡行	蓮池上天神遺跡	—	福田義彦	1984	1983～84	11世紀の遺構と埴田、埴田製品や龍泉系青磁出土、埴田注の内外港としての性格が報告される。佐賀市教育委員会調査
105	藤木三本松遺跡	佐賀県佐賀市兵庫町大字藤木	民間整理	イ	丸瀬	藤木三本松遺跡Ⅰ	第3集	角江一朗	2006	2003	龍泉系青磁Ⅰ類・実直系青磁器など共存
106	ウニ屋敷遺跡	佐賀市兵庫町大字藤木大字川久保字藤木	宅地開発・旧道建設	の	〇	ウニ屋敷遺跡	第101集	中野亮・角江一朗	1999	1994～96	埴田のウニ屋敷遺跡、下村遺跡から埴田製品出土
107	藤原田遺跡	佐賀県佐賀市久保原町大字川久保字藤原	九州横断自動車道建設	の	圓足規	大門内遺跡	第101集	福田義彦	1990	1977～78	山王山古墳に近接、遺構に伴う、
108	牛島遺跡	佐賀市(旧佐賀郡)大和町大字久井井	西千手道跡2-7区 久良遺跡	の	〇	西千手道跡2-7区 久良遺跡	第80集	中野亮	1997	1995	遺構は中世・近世の埴田と埴田の、龍泉系青磁器Ⅰ～Ⅱ類、黄楊系土器など共存
109	西千手道跡	佐賀市牟礼町大字千手布上-一本松	九州横断自動車道建設	の	〇	西山田一本松遺跡	第10集	渡谷林(調査担当・天本・副島・本田・山田)	1996	1985～86	
110	本村龍遺跡	佐賀県(現佐賀市)大和町田田	土地改良事業	イ	丸瀬	本村龍遺跡・久保三本松遺跡	第10集	田中徳孝・福澤敏博(編著)・松浦直也・山田	1980	1993～94	
111	肥前前所跡	佐賀県佐賀郡 井笠屋	史跡整備	フ	圓足規2 なし	肥前前所Ⅰ	第58集	七田成昭	1981	1978～79	
112	肥前前所跡	佐賀市(旧佐賀郡)大和町尼寺字真島	史跡確認調査	イ	長方規	肥前前所Ⅱ 肥前前所Ⅲ	第78集 第79集	高瀬直郎	1985	1982	第2次調査 政庁西側の遺構分析を調査

	宮地蔵行寺道跡	熊本県八代市宮地町小畑	九州新幹線建設	イ	指形型規 (中空円 面説と報 告)			八代平野干拓道跡群・宮地小畑 道跡・宮地蔵行寺道跡群	熊本県文化財調査報告 書	第254集	宇田員将・長谷部善一・清田 英祐	2010	2003	西海道の西沿いに位置し、隣接する小畑道跡を含めて書 物的な大規模性欠乏を検出
203	西片町道跡周辺	熊本県八代市西片町沖	表面採取	?	圓足規			西片町道跡	熊本県文化財調査報告 書	第242集	上原源隆・長谷部善一	2007	1950年代?	江戸相模探集、八代市立博物館蔵、三島格1961に紹 介・掲載された要則からは大和土字源がはさまれない
204	西小原道跡	球磨郡上村(現あまじ町)西小原	?	イ?		○		須恵村誌	須恵村	—	鶴崎政彦	1995		渋谷孝・坂本公重・前田一幸他1967『下川山頭車窓探 検調査報告』(県立球磨工業技術郷土研究所昭和41年 度研究集録)に道跡の概要を報告
205	下川山道跡	熊本県球磨郡錦町大字一武字下川山	学術調査	エ	圓足規			生産道跡基本調査報告書Ⅱ	熊本県文化財調査報告 書	第48集	松本健郎(調査隊長・坂本健 彦・前隊長三島格)	1980	1960(鎌野 教愛)	道跡の頭部に近い位置で、越州寄道跡血片・10世紀初 頭の寄台付土師窯も発見品が伴出。球磨郡街に間わる 人物が埋葬されたこと推定され、須恵氏の可能性が高い
206	堂園道跡	熊本県球磨郡あまじ町(旧藤原村)須 恵堂園	畑地帯総合土地改良事業	フ		○		堂園道跡・中島道跡・別府道跡	熊本県文化財調査報告 書	第159集	木崎勝弘	1997	1990～1991	
207	並木添道跡	宮崎県都城町高木江	工業団地建設	ウ				並木添道跡	都城町文化財調査報告書	第24集	基田光雄	1993	1992	
208	ニタ元道跡	宮崎県都城町志比田町3141他	大規模店舗建設	イ				ニタ元道跡	都城町文化財調査報告書	第29集	重永卓爾・下田代清海	1994	1993	重田に3ヶ所の溝が牙があり、間について金が付着し残存 重量17kg
209	馬渡道跡	宮崎県都城町馬渡	農業基盤整備事業	イ				馬渡道跡	都城町文化財調査報告書	第22集	栗田久博	2004	1999～2000	亀田分類群、近代(四面庇建物)S52、二面庇建物S53 あり。旧所道大開路あり
210	加治原B道跡	宮崎県都城町青横市町	農業基盤整備事業	フ?				加治原B道跡(平安時代～近世 編)	都城町文化財調査報告書	第66集	下田代清海	2008	2001～2003	
211	上妻B地区道跡	宮崎県西都市大字妻上上妻	確認調査	フ				国府・郡部・古寺跡等範囲確認調 査報告書	宮崎県教育委員会	Ⅱ 平成4 年度	長津裕重	1993	1993	国府特定地東端台地跡
212	諏訪道跡	西都市大字三宅字鹿分門		イ				西谷正「九州出土の陶器・石滑地 名表」	人類学研究 9号	1997		1997		
213	桂北道跡	宮崎県西都市桂北		?				宮ノ東道跡	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調 査報告書	第173集	藤木彰	2008	2003～2005	日向国府の位置する西都県台地から一ツ瀬川対岸の新 田原台地縁辺
214	宮ノ東道跡	宮崎県西都市大字岡字宮ノ東ほか	宮崎県自動車道建設	イ?	円面規・ 丸柄			下里切第3道跡	同上	第129集		2006	2006	
215	下里切第3道跡	宮崎県児湯郡高橋町上江下丘切 下本庄	宮崎県自動車道建設	ウ	○			西下本庄道跡	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調 査報告書	第15集	松林豊樹	1999	1994	
216	西下本庄道跡	宮崎県児湯郡高橋町大字本庄字西 下本庄	本庄高校グランド造成	ウ?				平田追道跡	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調 査報告書	第29集	川崎辰巳	2000	1996～1997	日向国府跡(幸崎道跡他)の約5km東南
217	平田追道跡	宮崎県宮崎郡佐土原町(現宮崎市)大 字上田島字平田追	宮崎県自動車道建設	ウ				大坪道跡	熊本県教育委員会 調査報告書	第79集	其和幸ほか	2005	1999～2001	安飯炊道跡など検出
218	笠野繁跡	鹿児島県鹿児島市冷水町346番地49号	病院女子寮建設	エ	長方規			薩摩国府跡・国分寺跡	鹿児島県埋蔵文化財センター発掘 調査報告書	—	小田富士雄ほか	1978		
219	大坪道跡	鹿児島県出水市美原町	九州新幹線建設	ウ	○			薩摩国府跡・国分寺跡	鹿児島県埋蔵文化財センター発掘 調査報告書	第79集	其和幸ほか	2005	1999～2001	安飯炊道跡など検出
220	薩摩国府	薩摩川内市御陵下町～国分寺町	史跡整備	フ	風字規2 点			京田道跡	鹿児島県埋蔵文化財センター発掘 調査報告書	第81集	川口彌之・山元真美子	2005	2000～2001	郡司「大國廣孫公が田を美し稱さるる旨の大甕出土。市 内の西ノ平道跡から御陵部方出土。(表28集)1983
	京田道跡	鹿児島県薩摩川内市中郷町京田	九州新幹線建設	ウ	猿面規16 点	○		大島道跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター発 掘調査報告書	第80集	宮田栄二	2005	1999～2001	道跡集中部跡・橋頭部跡のみの調査。23個の古代堅 六建瓦・南庄市の2×3個以上の樹立柱建物あり
	大島道跡	鹿児島県川内市東大小路町9番付近	九州新幹線建設	イ	風字規 丸柄			早山道跡・宮の脇道跡	鹿児島市埋蔵文化財調査報告書	第4集	小田富士雄	1986	—	銅鑄み類出土。鹿児島道跡分布地図(オンライン版)で は早山道跡に該当?
221	宮の脇道跡	鹿児島県薩摩市花岡町宮の脇		?		○		小田富士雄「九州発掘古墳出土 道跡地名集」(発掘古墳群)	八代市教育委員会 調査報告書	—	清水原庄・加佐英樹	1989	—	行基郡高山町の地下式構穴遺構2号墳から銅鑄み類 1点・巡方3点出土(全面出土跡常集成より)
222	波見道跡	鹿児島県肝属郡肝付町(旧高山町)荒 瀬・西山の上	—	?	風字規			広津田道跡1	大開町埋蔵文化財発掘調査報告 書	第41集	清水原庄・加佐英樹	2004	2003	平安朝の掘立柱建物16棟・墓土層105点出土。古代の 収の可能性と高橋純由の首道支那の可能性を報告者は 指摘
223	広津田城跡道跡	鹿児島県曾於市大隅町月野広津田	町道整備	?		○		広津田道跡2		第41集	山崎亮之・松田朝由	2005	2003	
224	高橋道跡	鹿児島県曾於市財部町南隈	東九州自動車道建設	イ				カヌ河道跡・師湯道跡・高橋道跡	鹿児島県立埋蔵文化財センター発 掘調査報告書	71		2004	2000	



第4図 九州内古代特殊遺物出土遺跡分布図